

人為的な生態系の攪乱状況（外来種と在来種の分布状況）

人々のレジャーや社会活動、経済活動などに伴って、本来は日本に生息しない海外の生物種が侵入し、自然界へも広がっている例が数多くみられます。また、在来の生物種においても、国内の別の場所に生息していた個体群が、その種の本来の生息地でない別の地方へ移植や放流される行為も古くから行われてきました。

このような人の活動に伴う生物の移動と再野生化により、生態的に優勢な外来種によって在来の生物種が減少したり、自然界では起こらない交雑によって地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。ここでは、人為的な生態系の攪乱を明らかにするために、外来種や、それらと生態的に競合する在来種の確認状況について整理しました。

【コブハクチョウ、アヒル、ベニスズメの確認状況】

（鳥類調査）

- 外来種のアヒルを北海道を除く日本全国の一級河川 8 河川で多数確認

外来種のコブハクチョウ、アヒル、ベニスズメについて確認状況を整理しました。

コブハクチョウは九州地方の川内川で 1 個体が確認されました。アヒルは関東地方から九州地方の一級河川 8 河川で多数確認されました。ベニスズメは関東地方の荒川で 49 個体確認されました。

（資料掲載：4-43～45、4-48 ページ）

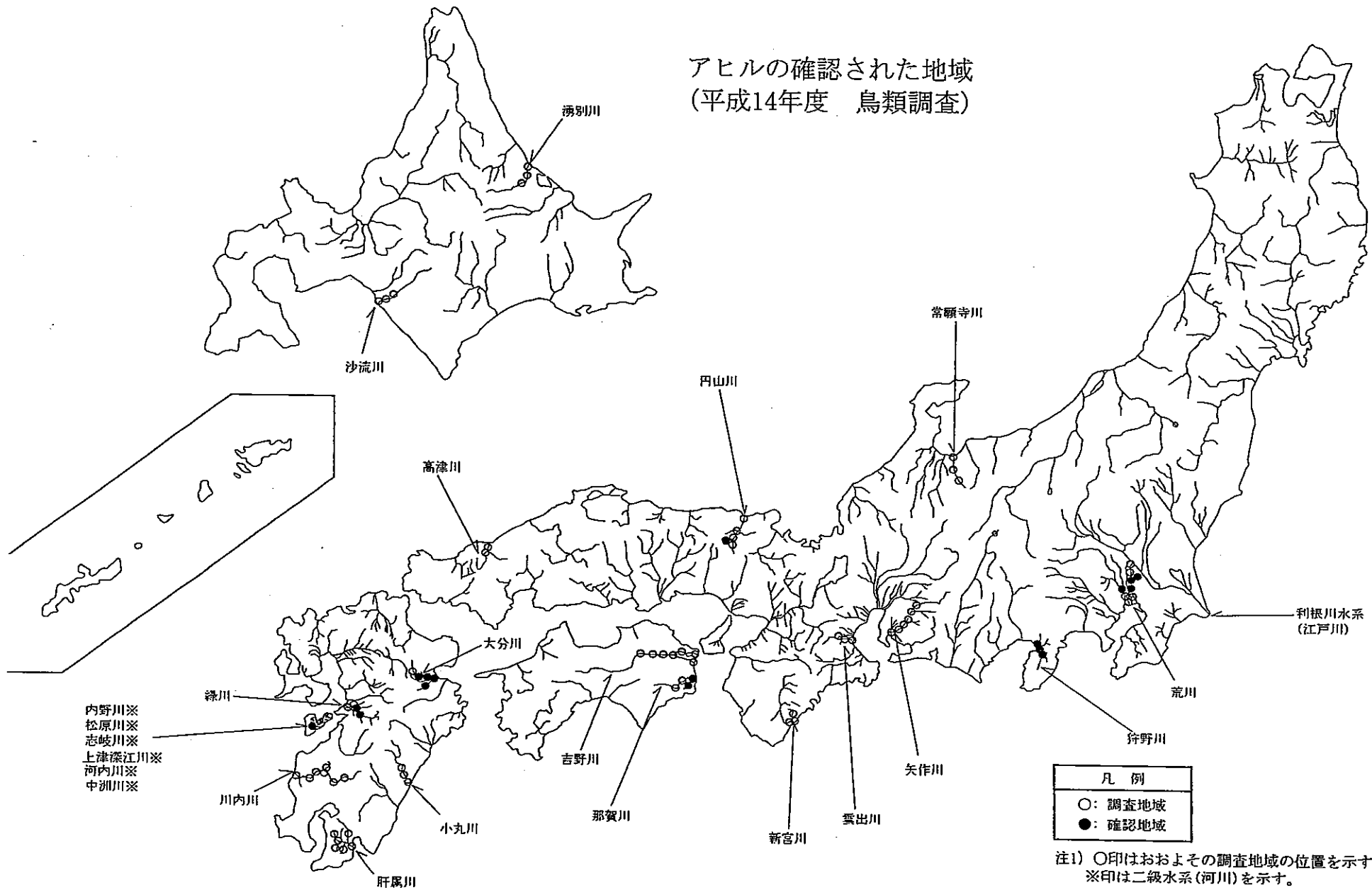
確認河川数の比較（対象河川：18 河川）

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
コブハクチョウ	0 河川	0 河川	1 河川
アヒル	5 河川	5 河川	8 河川
ベニスズメ	2 河川	3 河川	1 河川

コブハクチョウは、ユーラシア大陸に広く分布している種であり、国内では動物園や公園等で飼育されていますが、逃げ出して、しばしば湖沼や河川で確認されるようになってきています。アヒルは、食肉と卵を取るためにマガモから品種改良された鳥類であり、農家などで飼育されていますが、逃げ出して野生化しています。ベニスズメは、ビルマからインドの河原やヨシ原、農耕地に生息する種ですが、観賞用として輸入されており、本州以南で野生化し繁殖しています。

コブハクチョウは現地調査時の移動中に 1 個体観察されたものでした。また、ベニスズメは、確認河川数、個体数とも少なく、現在のところ全国の河川への定着はしていないようです。アヒルは、北海道を除く日本各地で確認されましたが、個体数の多い河川は、中部地方の狩野川（26 個体）、四国地方の吉野川（40 個体）、九州地方の緑川（37 個体）、大分川（30 個体）などでした。

アヒルの確認された地域
(平成14年度 鳥類調査)

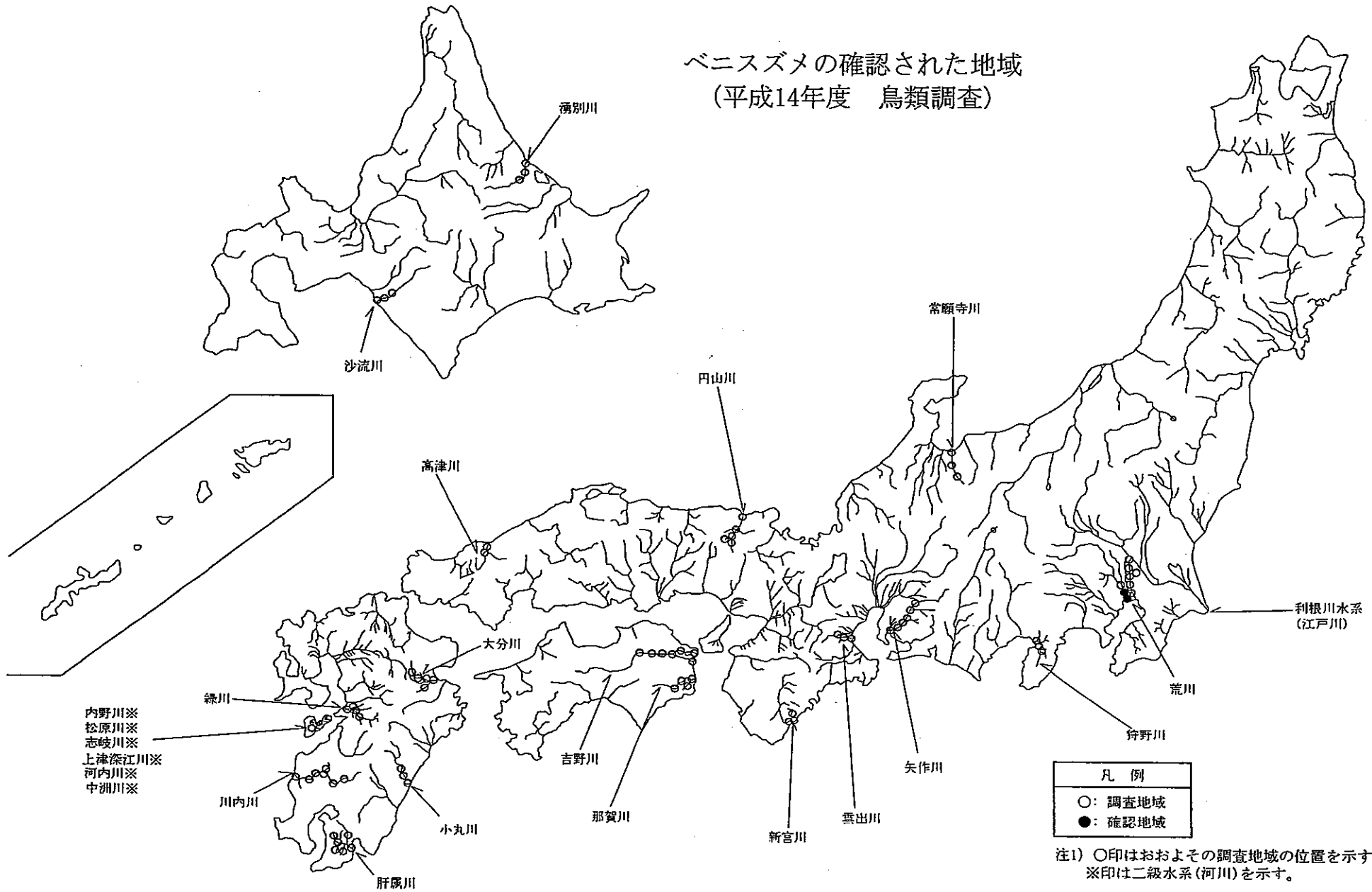


凡例	
○	調査地域
●	確認地域

注1) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

注2) 図中の確認地域は「集団分布地調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。

ベニスズメの確認された地域
(平成14年度 鳥類調査)



凡例	
○	調査地域
●	確認地域

注1) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

注2) 図中の確認地域は「集団分布地調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。

コブハクチョウ、アヒル、ベニスズメの確認個体数

地方	河川名	カモ目		スズメ目
		カモ科		カエデチヨウ科
		コブハクチョウ	アヒル	ベニスズメ
北海道	湧別川			
	沙流川			
関東	利根川(江戸川)		11	
	荒川		4	49
北陸 中部	常願寺川			
	狩野川		26	
	矢作川			
近畿	雲出川			
	円山川		2	
中国	新宮川			
	高津川			
四国	吉野川		40	
	那賀川		11	
九州	緑川		37	
	大分川		30	
	小丸川			
	川内川	1		
	肝属川			
	河内川※			
	内野川※		1	
	中洲川※		11	
	志岐川※		1	
	松原川※			
	上津深江川※			

注) 水系名(河川名)欄の※は2級河川を示す。